

牛久：学校周辺に見る自然

第5号 みずべ公園

2016年7月8日発行

＜初夏のみずべ公園・生きもの観察 ～③植物に集まる虫たち - シロツメクサとムラサキツメクサ＞

皆さん、こんにちは。5/12 ひたち野うしく小4年生と歩いたみずべ公園、今回はよく似たマメ科の仲間のシロツメクサ、ムラサキツメクサとそこに集まる虫たちです。



左は、ムラサキツメクサです。シロツメクサと同じく小さな花が球状にたくさん集まっていますが、その一つ一つをよく見るとインゲンやエンドウと同じ「まめの花」であることが分かります。

シロツメクサもムラサキツメクサも、牧草として世界中に広がったヨーロッパ原産の草で、江戸時代、ガラスの器を日本に船で運ぶ時に、割れないように間につめたので「つめ草」の名がついたと言われていました。ヨーロッパ原産で、牧草として広まったムラサキツメクサ。



ムラサキツメクサ(左)やシロツメクサ(右)などマメ科の仲間によく寄生するヤセウツボ。根がつながって栄養を奪う。

さて、植物を食べるのは草食や雑食の動物ですが、他の植物から栄養を奪い取って成長する植物があります。上のヤセウツボもそう。シロツメクサやムラサキツメクサと根でつながって、栄養を吸い取ってしまいます。だから緑の葉がなくても成長できるのですね(葉は鱗片状に退化)。農作物に被害を与える可能性があり「要注意外来生物」に指定されていますが、今年は特に多く気になりました。



シロツメクサには、ミツバチなどハナバチの仲間がよくやってきます。左はセイヨウミツバチ。頭をつつこんで蜜を吸っていますね。この時花粉がついて、別の花の蜜を吸うときにその雌しべに花粉が付き実ができます。花は受粉すると外側から順にたれ下がりますが、ムラサキツメクサの場合は受粉してもたれ下がることはありません。

頭をつつこみ蜜を吸うセイヨウミツバチ。



ムラサキツメクサの蜜を吸うイチモンジセセリ（左上）とチャバネセセリ（右上）。蜜はとるが、花粉は運ばない。ツマグロキンバエは花粉や蜜をなめるハエだが、花の口を開けられず口先も短いので蜜はとれない（左下）。ヤブキリは他の虫を食べるキリギリスの仲間だが、幼虫は花粉や葉などを食べる（右下）。

他にはチョウの仲間もよくやって来て長いストローを伸ばして蜜を吸いますが、ストローは細いので花粉を運ぶことはほとんどできません。花は蜜をとられるだけ。またこの日は見つけれませんでした。ムラサキツメクサにはミツバチでなくマルハナバチの仲間がよく蜜を吸いに来ます。じつは花のつがシロツメクサよりも長くて、ミツバチの口では蜜まで届かないのです。ツマグロキンバエがとまっていたのですが、花の口を開けられないので、蜜をなめるようすはありませんでした。そして興味をひかれたのがヤブキリの幼虫。キリギリスの仲間では他の昆虫を食べる肉食と聞いていましたが、なぜか花の中にいるのをよく見かけます。獲物を待ちぶせしているのかとずっと思っていました。調べてみて幼虫は花粉や葉を食べるのだと知りました。もっと観察の目を鍛えなくてはと思いました。



ムラサキツメクサ(左)とシロツメクサ(右)。

ムラサキツメクサ(左)とセッカツメクサ(右)。

さて、よく似たシロツメクサとムラサキツメクサですが、並べて観察するといろいろ違いが見つかります。まず茎はシロツメクサでは毛がなく長くはって伸びますが、ムラサキツメクサではまっすぐ立ち上がって毛がたくさんあります。またムラサキツメクサは球状の花の集まりのすぐ下に1対の葉がつきますが、シロツメクサにはありません。受粉後の花の違いは上で述べました。ぜひ、実物でくらべてみましょう。時々、ふつうのムラサキツメクサに混じって白花のものが咲いていることがありますが、これはムラサキツメクサの品種でセッカツメクサ(雪花詰草)と呼ばれています。シロツメクサとまちがえそうですが、上の違いが分かっていたら見分けられるでしょう。

【理科支援員：宮内】